
C h e r i e

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

Cherie

【Nコード】

N5952C

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

妻がいるのに他の人を好きになってしまった。けれどその先にあるのは悲しい別れだった。チェッカーズシリーズ第二十一弾。中期のシングルからです。ジャケットが最高でした。

第一章

Cherie

親愛なる君へ。今はそう思う。

あの時の僕は馬鹿だった。だからこんなことになってしまったんだ。そのことはどれだけ悔やんでも悔やみきれないし謝っても謝りきれない。それはわかっている。

それでも僕はあの時のことを思い出さずにはいられない。はじめて会った時から。そして最後まで。今それを思い出して一人たたずんでいる。

「ねえ君」

最初に声をかけたのは僕だった。ある雨の日のことだった。

君は一人駅前で立っていた。タクシーを待っていたのを覚えている。

「どうしたの？」

君は薄く化粧をしていて黒い髪を長く伸ばしていた。淡い紫のワンプールが本当によく似合っていた。

そんな君に声をかけた。最初は何気ない言葉だった。けれどそれが全てのはじまりだった。

声をかけると君は顔を向けてきた。そして言ってきた。

「はい」

最初の言葉だった。僕はそれを受けてまた口を開いた。

「誰か待ってるの？」

「いえ」

それは首を横に振られた。それで深みに入り込んだのが僕だった。

「いないんだ、誰も」

「そうですけれど」

「そう、だったらさ」

Cherie

その言葉に気をよくして踏み込んだ。そのうえで提案した。

「どっかで時間潰さない？」

「時間って？」

「雨宿りだよ」

僕は言ってきた。

「雨宿り。どう？」

「けれど」

その言葉に君は俯いてしまったのを覚えている。その時は駄目かと心の中で思った。言葉には決して出しはしなかったけれど。

「今は」

「いいじゃない」

僕は軽い調子で言った。

「お互い誰もいないんだったらさ。そうだろ？」

「うん」

「いい店知ってるんだ」

この辺りは馴染みだった。よく妻と二人で来ているからだ。今妻は訳あって側にはいないけれど。

「そこで飲もうよ」

「飲むの」

「うん、飲むんだよ」

僕はにこりと笑って答えた。妻がいないせいもあって気が楽になつていたので今自分認める。

「二人でね。どう？」

「それじゃあ」

君はお酒が好きだった。だから言葉に乗ってくれた。それがはじまりだった。

そと手を出してきた。白い細い手を。僕はその手を取った。

「お願い」

「うん」

にこりと笑って頷いて。そしてそのまま店に入る。そこは洒落た

バーだった。暗くレトロな内装の店でカウンターでは若い女の子のバーテンがカクテルを作っている。まだ明るさの残っている開店したての時間だったがそのバーテンはもうカクテルを作っていた。「いらっしやい」

バーテンさんは僕達が店に入ると声をかけてきた。はつきりとした目鼻立ちできつい目をした女の人だ。長い黒髪を上で纏めていた。それがうなじまで見えてやけに妖しく見える。

「こっちだよ」

僕は彼女をエスコートしてカウンターに案内した。バーテンの前に二人並んで座った。

「ここなんだ」

「ここにこんなお店があるなんて」

「知らなかったの？」

そこだけ灯りがさしているカウンターのところまで声をかけた。後ろのまだ誰もいない席のところには灯りはない。カウンターのところだけである。淡い白の光がグラスやボトルにはね返ってそこだけが眩しい。カウンターに置かれている空のグラスにはビー玉が入れている。それも眩いけれど淡い白い光を反射させていた。

「ええ。バーはあまり行かないから」

「そうなんだ」

僕はそれを聞いて少し残念に思った。

「じゃあカクテルなんかは」

「あまり」

また僕に答えてくれた。

「飲んだりしないわ」

「そうなんだ」

「だからかえってね」

「興味がつてやつ？」

「ええ」

こくりと頷いてくれた。

「よかつたら。どんなのがいいか教えて」

「そうだね。だったら」

「クローバー、クラブ、カクテルなんてどうかしら」

「あれ？」

「勧めてきたバーテンに顔を向けた。」

「そう、あれよ」

「答えて僕に妖しい声をかけてきた。」

「どうかしら」

「あれだつたらいいね」

「僕はその勧めに頷いた。」

「それでいいかな」

「それってどんなカクテルなの？」

「ジンを使ったカクテルだね」

「僕は答えた。」

「身体にもいいんだ。飲みやすいしね」

「へえ」

「まずは飲みやすい。それが大きいかな」

「そうなの。それじゃあ」

「うん。君はそれね」

「ええ。お願い」

これで君の最初に飲むカクテルが決まった。次は僕だった。

第二章

「じゃあ僕は」

そしてバーテンに注文する。

「パライスイス」カクテルね」

「わかったわ」

同じジンをベースにしたカクテルだ。ただクローバーがライムジュースなのに対してパライスイスはオレンジとアプリコット」ブランドーが入っている。同じジンをベースにしても味が結構違っているのだ。

「お待ちどう様」

暫くして二つのカクテルがそつと差し出された。僕はワイングラスを手に取ってそれを打ち合わせた。それからカクテルに口をつけた。

「どう？」

「何か」

君は不思議なものを味わう顔をして答えてきたのを覚えている。

「飲みやすい。不思議に」

「そうだろ？カクテルってそうなんだよ」

僕はにこやかに笑ってそれに答えた。

「飲みやすいんだ」

「そうなの」

「そうだよ。じゃあまだ飲むよね」

「ええ。じゃあ次は」

それに応えて言ってきた。

それから僕達は朝まで飲んだ。夜明けまでその店だけじゃなく他の店にも入った。気がつくともう夜明け前だった。

「飲んだわね」

「そうだね」

僕はそう言葉を返した。

「いや、今日は楽しかったよ」

久し振りだった。だから本当に楽しんだ。

「ねえ」

その時君は僕に声をかけてきた。

「一つ聞きたいことがあるのだけれど」

「何？」

「恋人……いるの？」

じつと僕の目を見詰めて声をかけてきた。その目があまりにも綺麗だった。それで僕はつい言っではならないことを言ってしまった。それが全ての間違いだった。

「どうなの？」

「いや」

ここで間に合った筈だった。しかし僕はそれを振り払った。そして言ってしまった。

「いや、いないよ」

「そうなの」

「うん」

こくりと頷いた。けれどそれはそれは偽りの頷きだった。

僕は結婚している。今もだ。そしてこの時僕は一人目の子供がもうすぐ産まれようとしていた。それで妻は実家に帰っていたのだ。

そんな時だった。一人で羽を伸ばして楽しんでいたので。その中で嘘だった。

「それじゃあ」

「どうするの？」

「朝まで飲んだし」

俯いて言ってきた。

「よかったら」

そして。

「付き合わないかしら」

「そうだね」

嘘を隠して頷いた。僕は卑怯だった。

「よかつたら」

「ええ」

そのまま抱き合い短いキスをした。それがはじまりだった。淡い恋がはじまった。彼女にとっては何も隠すことのない、僕にとっては偽りの。けれどそれは本当の恋だった。

付き合いだしてからすぐだった。君は僕に声をかけてくれた。

「いい場所見つけたわよ」

「どんな場所？」

「あのね」

僕達はこの時晴れた公園にいた。そこで楽しい憩いの時を過ごしていたのだ。眩しい日差しと緑の草原が実に気持ちよかつた。

「ここからすぐに行ったところだけれど」

「うん」

「噴水があるのよ」

「噴水？」

「そうよ。けれど只の噴水じゃないのよ」

君は笑顔で述べてきた。明るい笑顔を今でも覚えている。

「そこから街中が見えて。凄い見晴らしがいいのよ」

「よさそうだね、それって」

「そうでしょ？だから」

彼女は僕に言ってきたのだ。

「今から一緒にね。どう？」

「うん、いいね」

まるで学生時代の恋のようにその言葉に頷いた。

「それじゃあ今からね」

「ええ、こつちよ」

すぐ後ろを指差した。そこには山があった。

「あそこを登って頂上なの」

「そこか」

「そうよ。山って言ってもそんなに高くないし」

「いいね、それって」

「だからよ」

僕を誘ってきたのだ。

「行きましょう」

「うん」

それを受けて僕は立ち上がった。そして彼女も。

「それじゃあ」

「ええ」

そのまま噴水のところに向かう。丘の上にそれはあった。

白いコンクリートで舗装された足元に周りは緑で覆われていた。

そこに噴水がある。

「どう、ここ」

彼女は僕に顔を向けて問うてきた。

「綺麗でしょ」

「うん、凄くいいよ」

僕はその言葉に頷く。まるで別世界のように感じられた。

ふと噴水に目をやる、するとそこには虹が浮かび出ていた。小さ

いけれどそれは立派な虹だった。それが僕の目に入ってきた。

「ねえ、これ」

「ええ」

君は僕の言葉に顔を向けてくれた。そして虹と一緒に見る。

「綺麗ね」

「そうよね。この景色もいいでしょ」

「うん、凄くね」

彼女の言葉に頷く。街が全部見える。こんなに綺麗な街だとは思わなかった。

「また来ない？」

彼女は僕に声をかけてきた。街を見ながら。

「また」

「そうだな。また」

僕もそれに頷く。それもいいかも知れないと感じた。

「一緒にね」

「そう、また一緒に」

彼女はにこりと微笑んでくれた。すぐにまたここに二人で仲良く、そして楽しい気持ちで来るつもりだった。けれどそれは適わなかった。

第三章

手をつないで帰る。君が子供みたいにはしゃいでいたのを覚えて
いる。それは全て儂い思い出でしかない。何もかもが儂い思い出だ。
それから暫く経って彼女のアパートに二人でいた時だった。たま
たま彼女はコンビニに買い物に言って席を外していた。ここで僕の
携帯が鳴った。

「あっ」

鳴ってはじめて気付いた。電源を切っていなかったことに。

彼女もいないのでそれに出た。すると出て来たのは妻だった。

「あっ、どうしたんだい？」

「実はね」

「うん」

僕は妻の話聞いていた。彼女のことは頭から離れていた。

「予定が早くなったの」

「何かあったの？」

「別に何もなければどね。用心なのよ」

妻は僕に言ってきた。

「入院するのは」

「入院なんだ」

「そうよ」

妻は答える。

「出産にはまだ早いじゃない」

「そうか」

「そうよ。それでね」

「うん」

「その時になったら来て」

「こっ誘ってきた。」

「ほら、お仕事今順調なんでしょう？」

「まあね」

僕は作家だ。この前一作脱稿したばかりだ。当然彼女もそれを知っている。そのうえで言葉のやり取りなのだ。

「だったら」

「わかったよ、じゃあまた連絡して。それから」

「来てね」

「うん、それじゃあね」

「ええ」

これで電話を切った。彼女の部屋にいることは頭から消えていた。妻と子供のことだけが頭にあつた。だから扉が開いたことも気付かなかつた。そこに彼女が帰っていたことも。全く気付いてはいなかったの。

「……………そうだったの」

不意に声がした。彼女の声だった。

「いたんだ」

「……………」

彼女に気付いた。気付いたが何も言えなかつた。真実がわかつたからだ。

「御免なさい」

彼女が謝ってきた。

「気付かなかつたから。私」

「待つて」

部屋を飛び出した彼女を追う。それまでの明るい日差しが急に消えて暗がりになっていく。雨の中で僕は彼女の後を追いかけていった。

彼女はあの公園に来ていた。僕もその後を追う。そのまま噴水のところへ行くから僕も向かう。そしてそこでやっと一緒になった。

「御免」

僕はそこで彼女に対して謝った。

「嘘をついていたよ」

「いいのよ」

けれど彼女はそんな僕を責めたりはしなかった。こう言って街を眺めていた。

「だって。いえ」

そして言った。

「こうしたことってよくあるから」

「.....」

その言葉に何も言えない。僕には言う資格がなかった。

「だから。仕方ないな」

「そうなの」

「だからね」

彼女は言ってきた。

「さよなら」

「終わりだね」

「ええ」

僕達は傘もささずそこに立ち尽くしている。その中で話をしていったのだ。

「これでね。何もかも」

「そう」

「だから」

僕の方を振り向かない。

「最後のお別れまでは。一緒に行きましょう」

「一緒にいていいの？」

「最後だから」

君の最後という言葉が今でも耳に残っている。それが離れない。

「駅まで」

「わかったよ。じゃあ駅までね」

「そうよ」

こうして僕達は駅まで向かった。雨の中を傘もささず二人で。冷たい雨が身体よりも心に滲みた。こんな冷たい雨は今までなかった。

駅につく。僕はバス停に向かった。

「それじゃあ」

「そうね」

お別れの時だった。あまりに唐突でそして何も言えない別れだった。それが今僕達にやって来た。

「じゃあ」

「うん」

丁度バスが来ていた。それに乗る。最後に僕はバスの硝子越しに彼女を見た。見れば彼女は僕に対して優しく笑ってくれていた。

けれどその目は泣いていた。涙の笑顔だった。その笑顔で僕を見ている。僕はそんな彼女から目を離すことができない。僕の身体も心も濡れていたが彼女程じゃなかった。

雨が何時の間にか止んでいた。その中で僕達は見詰め合う。けれどそれはほんの一瞬だった。運転手さんの声が入ってきた。

「出発します」

「じゃあ」

お別れだから。彼女を見る。その時だった。

泣いた笑顔のまま上を指差していた。そして僕に対して呟いてきた。

それは言葉は聞こえなかった。それでも唇の動きでわかった。雨雲が遠ざかっていく中で僕はその唇の動きを追うのだった。彼女は言っていた。

『親愛なる貴方に。最後にさようなら』

それで終わりだった。僕に対する最後の言葉だった。バスは発進して彼女の前から消えた。それで何もかもが終わってしまった。

雨雲も遠くへ行ってしまうていた。通り雨だった。激しいけれどそれは通り雨だった。

そして僕達のこと。結局は通り雨だった。

何も言えなかったし言わなかった僕だけけれど。その通り雨は受け止めていた。その雨を受けてそれが過ぎ去ったのを感じて今思った。

C h e r i e

「運命だったけれど。通り過ぎるものだったんだ」
今はそう思う。けれど忘れはしない。嘘についてそれで潰れてしまった恋だけれど本気だったから。それは自分でも受け入れたのだった。今も。

C h e r i e 完

2007・1・15

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

PDF小説ネット発足にあたって

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5952c/>

C h e r i e

2009年3月24日10時59分発行